

法然上人伝(十卷伝)の背景とその内容の一考

藤田 雄

源空上人私日記

私日記

法然上人伝記

醍醐本

本朝祖師伝記絵詞

四巻伝

法然上人伝記

九巻伝

拾遺古總伝

在徳伝

法然上人伝絵詞

环阿本

法然上人行状絵図

刺伝

黒谷源空上人伝

十六門記

法然上人伝

十巻伝(本書)

正源明義抄

明義抄

序

凡そ偉人高徳として、世に存在する所の人々には百未から外護の智慧識、権越の内助及び普
衆衆に待つ所偉大なり。外護者、内助者となりて、其の境圍を台導し、其の内助を整頓する事

が、この場合は、偉人碩徳の活躍を得て望めない。我浄土宗の元祖法然上人は七百五十余年の往昔、人天の大導師として、当世に照臨し給ひ、百代の後に被る者は、主として上人の円護、非凡絶倫の恩徳に因ると雖も、又一般の理教に漏ずして、外護者、内助者ありて、上人の教化を寶貴し奉りしが如く拜せらる如く、實に千古の大徳万代の師範として一代行化の芳躅は燦として衆人鑽仰の絶鑑であるが、現在の仏大主に願願の世事に衆人教化の尊嚴念仏の道を知り得る者は幾程か特に聖道の教理を学ぶ者並よ、幸い浄土學を専攻して、京祖の弥陀信仰の道をどうにか判るようになったが、まだまだ遠き彼方に存るようで自信にとほしいが、如何に宗徒に念仏の功徳を説いても、全国すみずみに伝はる元祖大師一代記『私日記』『祖師伝記』等、古今衆曲に殆んどその顚倒を見ない程の十教部一百余巻を授へる後古より知られてゐる如く、京祖の夢寐は一生涯を知らずして説法する事は不可能であると云ふ事に注目して、今圓法然上人の生涯及びその一生涯を通じての教化を知ろうとした所に法然上人伝研究の端を発してゐる。特に『十巻伝』の背景を諸上人伝と比較して、如何なる伝記を参照して又基となつて製作されたものの、そして如何なる水に伏つて飲まれたものかを考察つきたいと思ふ。

本論

そも、『十巻伝』とはどのような伝記かと云うと、現在の所多く研究されておらず、單に概略のみしか説明されて居らず、『仏書全書解説』『浄土一巻』の二つより参して見ると、十巻曰『黒谷法然上人伝』『十巻伝』『西山十巻伝』『黒谷上人伝』と云はれて居り、その

内訳は、法然上人が叡山の黒谷に住して居られた所からの名跡と云う。本書は十巻から成つて
いるから『十巻伝』と云はれ、現存する所の本書が三河国山中の浄土宗叡山派の法蔵寺に藏せ
られてゐるところから『叡山十巻伝』と称せられてゐる。本書は、諸に片假名が入つてゐるも
主に漢文体に祖師上人の礼略より生聚、修持、禪宗、法華、往生、小愈山での夢窓菴建立に致
る七十九段に分けられその間に、弟子衆人の教化及び、諸事項が入り込み、奇瑞奇化を綴り込
んで、元祖の一生の行状を巧みに記して居り、待に交つた事として、巻二に母儀並本國師上
治事、巻六に親鸞聖人入浄土門事、巻十に嘉祥の法進の資料が採録されてあり、現存の本の成
立年代とも云うべきものは、本書の奥書には、

大永六年丙戌 二月十四日 願飲智鑑判 一部十巻今成就 (巻一)

大永六年正月廿七日 (巻四)

文明十九年丁未 舊月七日 (巻五)

千時大永六年初春中旬三日 舊曆文 (巻八)

千時大永六年 丙戌 正月十七日 (巻九)

大永六年正月十八日 (巻十)

右の如くで、これを基にして本書を研究して行く、先ず序文は、『仏教文化研究』の第二号、
「法然上人伝研究會紀要」に詳しく述べられてゐるので簡単に述す。
序文は三段に分かれていて、序一は

夫以我大師釈迦如來……不云男也老少平生清度云母後利益云
九巻伝の云う所の

『天以。我師釈迦如来は……男女老少をとほす、平生の清度といひ、夢の後の巨益といひ』と、同文で私としては『九卷伝』と同系統と見る。特に序一で受つた所は……夢後の利益云うの後に続く、

『今於此道場大師聖靈清生利物新影曼陀開展讀誦經云々』

の文に亦一に注視して諸先生に尋ね、文獻を見るも判明せず、思うにこの新影曼陀が現存するか否かによつても本書の成立年代及び複製系統が判明するのではなからうか。と疑問を持つ所である。明確には断定は出来ないも本書の作者が單に衆生清度利益の爲に拜して書いたものか、後世真の十卷伝を古くから行はれた寧ろの如き意味で寫して現存せる十卷伝を依つた時に曼陀を拜した事をつけ加へたかは、弱輩には判らないも、つけ加へたか又は諸々の法然伝記を參考にして書さし爲に書寫とするせしものなら現任知恵院に南北朝時代を下らないと云はれる(元道詮強師)法然上人曼陀夢があるから、文明年間の現存の本書から推察すると、寧ろ智恵がこの曼陀夢を拜していても不思議ではないと思はれる。その他では元祖の曼陀夢と云はれてゐるものが現在有るとは、今のところ所かないから、もし前述の事が事実であるとする(十卷伝)成立年代判明の鍵ともなり、及ぼす前の影響も大なるものと思はれる。

序二は、序一の勅伝系統と異なり、伝法縁系統に属してゐて、『四卷伝』琳同本』とによく相似した序文である。次に示すと、

『又云蓋以諸公世給暨共施益日月照州給計時廻光爰以正法千年月氏佛法盛像法千年興旦仏法

弘』

此の文は『四卷伝』の「誕生の因」に続く

『諸仏の世を利し給……像法のはじめ漢につたはりて』
は大体に於て変りなく

『加之摩騰後漢来……三國仏法將來』

の文は『四卷伝』の

『しは国は漢明帝に……仏法興隆粗如來在世にことならず』

の文に依り

『愛聖人童形叔山雲分……誕生遷化後至伝作讀嘆摩耆也』

の結文は、『琳阿本』の

『上人十三にして叔山の愛に……上人誕生のはしより遷化の後に至るまで絵をつくり』

の文に依り、又『四卷伝』に依るを主とするは、『琳阿本』にも大体阿文同系なるも『四卷伝』

が製作年代が古いとして、主とする。而し『十卷伝』の作者は、はたしてどちらの伝記に依り

しかは判らなれ。

序三では

『抑群疑辨興出吾……八十三万六千三百二年』

の文のみ『四卷伝』の

『甯州中印度淨飯王の御宇……八万六千三十六年』

迄の文と同系で、『琳阿本』ともほぼ同じで、他の部分は諸伝記に概当する所なし。序一・二、

三は凡て形態を中心としたもので内容を中心としたものでない事を述す。

本書の本文に入つて先ず感じる事は、先人の述べられたのを参して、『真宗教興志』の評に、

『実実』は『古徳伝』に同じく、怪は正源明義鈔と讀し、同々『實日伝』(『勅伝』)に似たり。又『淨全』は一巻の解題』にも

『本二序の初の数行は正源明義鈔の初段と相似し、云々』

の如く解綴せられているも、『明義抄』云々と云はれるも私としては、『明義抄』の制作年代は、『十卷伝』以後と見なす望月博士説に依り、『十卷伝』の成立とその背景を探究するに封鎖語伝記から一応列にして、又『古徳伝』に同じも、眞宗系の人々の解綴で比較して見てそれは奇きであつて、『十卷伝』を参考にしたと思はれる段も有るも特に『九卷伝』を参考にしたと思はれる段が非常に多く、大體同文又は、よくその形態、内容が似通つてゐるので、『九卷伝』で五七段、『勅伝』四の余り、『古徳伝』二九である如く如何に、『古徳伝』に依る所大と云はれていても私としては先づカ一に、『十卷伝』の依りどころと成つたものは、『九卷伝』と解する方が正しくはなからうか、二三の語伝と同じ所又異なる所を以て文の内部に文列の前後、余部に入り込んだり抜けていたりするも、決して、『古徳伝』に依つたのではなく、『九卷伝』に一番關係の深い伝記と云える。しかうば、前述した如く、『親鸞聖人入淨土門』は、『勅伝』系統の六谷御廟を中心とした現在の浄土宗の派に属する伝記には、どこを採つても親鸞聖人は出て来ないばかりでなく、あまつさへ、『九卷伝』、後上人配国の後成覚房の弟子白心坊といへる僧、起後国にして專此一念義を立てけるに、光明房といへるもの云々、『古徳伝』、『蓮花集』信聖人に接くの因』に、『善信聖人云々』と有り、『善信聖人と対談の因』に、『建仁元年辛酉春の此也、今年聖人六十九才、善信上人二十九才』とあり、本書より後作と思はれる、『明義抄』の、『親鸞聖人御参の事』に、叔山の住侶當時軌範を改めた事を

『改名を善信房とたまはり執事をあらためて緯空となのりたまひける云々』

となつてゐる如く、又元久元年善上人の元に参加して、他の多くの門弟をさしおきて、元久二年の春早くも選振氣をさづけられ同年七月上人の眞影をも画する等、弟子としてこの上もない好待遇をうけるはずがない如く、單に善心と善信の置いのみにて、北国に配流とも有る様に、『古徳伝』に親鸞の事を善信房と称してゐるものを、『九卷傳』の文をそのまま、書くはずがなく、『九卷伝』作制当時は、親鸞の廟堂中心としての教団が統一されんとした境、所謂その対抗上親鸞即善信を善心として大谷御廟を中心とした現在の浄土宗教団は地盤即ち勢力争ひの爲にやむを得ず取り上げたもので、その證據に当時確固たる教団組織を有していた西山派に對しては、善恵上人は白木の念仏を唱へて元祖大師より破門されたにもかかはらず、『九卷伝』『善恵上人傳』の末に、『当世西山門と号し、小坂義と称するは、假善恵上人の流也』と、かくの如く善信房の様に邪義として述べてゐる伝記はない、勿論、『九卷伝』と同時代の『勅伝』にも云へる事であるも、本書作制当時はすでに親鸞の廟堂中心教団とは対抗しなくても、大谷御廟を中心とする勢力も充分に、その地盤を築き、京都に於ける勢力も大体内一化し落つきを得て来たと思はれそのわけは本書によく善香の性質、当時の法然門下より分派せし各教団の世吹をよく反影さしているのである。

善恵房に關しては前述の如く、『九卷伝』『勅伝』と同文にて述べる必要はないと思はれ、親鸞に關しても、本書卷六にある『親鸞聖人入浄土門』の内容は、『古徳伝』『善の眞系系の元祖伝』記より抽出してゐるから選振氣を許され、上人の眞影をも画してゐるが、卷九『一念邪義流布』の所では善信房云と有るも、大谷御廟を中心とした『九卷伝』『勅伝』等と同系統の本書に

新嘗聖人に因した事項が書かれる様になつた事で判る。では西山・眞宗系の伝記と云はれる本書を何故に勅伝系の大谷御廟を中心とした伝記と云うのかと云うと、一つに伝記内容の怪奇、親鸞系の文を疎くと、『九卷伝』、『勅伝』、『琳阿本』、『十六門記』、『四卷伝』、『私日記』等の伝記に依つたと思はれる所が多く有り、又そうであると言はれる所ばかりであるから、眞宗系・西山系の伝記とは思はれないし、特に大争の事は、卷五の「聖光房争」の段で

『聖光聖人、教誠伝正義化尊年石、……當時統紫威号、彼聖光聖人流也』

と述べている如く、鎮西派の聖光上人を、元祖門弟中の正しき教義を伝へる者として、聖光上人の元祖門下の正統性を明瞭に表現しており、前述の親鸞聖人の和義流布の文もある如き理由から私は本書を大谷御廟を中心とした伝記と解するのである。即ち主として大谷御廟を中心とした教団組織の手になつたと思はれ、『九卷伝』を一番主としていると解する。

別項として、他の諸上人伝記には見られない変つた処をひろいあつてみると、先ず元祖の幼名は、蓮華王、面童童子、小矢児と呼ばれ、勢至れとは呼ばれていない、唯、勢至の応現せとは諸々に述べている。

次いで登山年代は、某氏は十五才とせられるも、私は次の事で十三才ではないかと思ふ。卷一の「嵩登山何母暇乞事」の前に、

『又安三耳仰春比寛覺相具此犯行何母堂許談登山事』とはあるも、その後には

『母堂暇得登山給予時、近衛院治天養二年乙春三月十三日生年十三才也』

とあり、『殿下御出参会之事』の登山送り歌に

『文殊像一体進上、天養二年乙三月十三日沙門寛覺祇面卷北谷持法房御足下書云々』

の如く本書では十三文説とすべきであり、先きの十五文、後の十三文には矛盾した所あるも、

『九老伝』卷五『山門雖起事』の七ヶ條の制案に於ける門人連署せしむるも、最初には『門人

五十七人の連署をとり』とし、後に『署判之門人七十五人略之』とあるように、一概に前文の

み参照して後文を参照にしない事は悪なることで、元祖滅后百年前後の製作であるこれらの伝

記は、當時のことであるから、資料少くなく、又教即ち年月日、人数等に訂する考へは現在の

様に重宝視する事なく、單に上人の伝記を書く事に依つて自己及び一清衆生救済マ度を競う思

想から生じた、寫聖的精神を有していた事は少なからず感じられる、又上人又安三年冬十五

文にて登壇成出家の時の名を、『四名考善弘』と名門付けられてゐる事も一考する所と思う。

卷二『母儀並本國師上名』に注目すると、人面として当然、父死して後初くして別れをつ

違国叔山に登山せし上人たりとも、又一人の愛児を思ふ母として、別れし後も何弄かのつな

がりがあつた事であらう。それを諸伝には記してなく、本書と『知恩伝』のみが取り上げてい

る、故郷に還された母が、後年状児を訪ねし事は、前述の卷二に、

『就中在堂母儀孤独而無恃存縱難可訪夢後覺路……即於舌水辺結一章庵爲母堂居前』朝暮

備膳且夕致考矣』

と母を思ふ心は出家の身にても同じで、この記事を書いた法然歸依者は、上人の母の運命に深

い関心をよせてゐる事は、見逃せない重大な事で、上人と母の生別の後を描いた諸伝の少く

を遺憾とする。

以上『十卷伝』の背景とその内容を考察するも、本書の成立を考へる時には、知恩院藏の

『七傳絵伝』と結びつけなくては判らない爲に、成立を述べない事にした。

そうして枚数制限の爲に、一字一句を細かに検討して自己の判断に誤ち無き事を発表出来ない事が残念であつた。

以 上